

大歳の自然



(一) 位置

現在、山口市の大歳地区と呼ばれる地は、昔の吉敷郡大歳村である。昭和十九年（一九四四）四月一日、平川村などと共に合併し、山口市の一地区となっている。その大歳地区は、山口県最大の山口盆地の南西部（山口市の中央部やや西寄り）に位置しており、東西約七キロメートル、南北約四キロメートルであるが、東方に行くにしたがつて狭くさび形をしている。（図1-1）

大歳地区の経緯度的位置についていえば、地区のほぼ中央にあたる山口市役所大歳出張所（大歳公民館）の立地する場所は、

東経 一三二度二六分三三秒

北緯 三四度 八分四四秒

である。

地区の東側は湯田地区の松美町・三和町に、

北側は湯田地区の前町・下市町・湯田温泉二丁目および吉敷地区の葵一丁目・中村・木崎に接している。西側は美祢郡美東町・吉敷郡小郡町



図1-1 大歳とその周辺

に接し、阿仙原の奥の鷲尾根から榎木山（四一五・九メートル）・高場山（一四五メートル）・的場に接し、山口県流通センターから榎野川へと至る線が小郡町との境界となっている。南側は榎野川を境に平川地区の平井・黒川および小郡町と接している。（図1-1）

(二) 面積・人口

地形は榎野川に沿った平野部と馬庭・河内の山間部からなるくさび形をなし、総面積は一〇・八二平方キロメートル（国土地理院測定）である。いま山口市を構成する地区別の面積は表1-1のとおりで、旧市内（大殿・白石・湯田）を除けば、名田島地区について小さな地区である。土地の利用状況は表1-2のとおりで、合併後の都市計画、特に戦後ベッドタウンとしての宅地開発が進み農地が減少しつつある。

人口は、平成十二年実施の国勢調査によれば、一九七一人、人口密度は二一〇六・四（人／平方キロメートル）である。これは、昭和十九年（一九四四）合併時の約四倍、昭和五十年に比べ約二倍と大きく増加している。

（表1-1）

表1-1 山口市地区別面積表

地区	面積 (km ²)
大歳	13.07
大殿	4.71
白石	4.09
湯田	72.85
仁保	43.83
小内	24.92
宮野	38.42
吉敷	26.27
平川	19.16
大歳	10.82
陶	11.52
鑄銭司	20.42
名田島	8.93
秋穂二島	16.15
嘉川	28.87
佐山	12.02

(山口市統計年表)

表1-2 土地利用状況

平成7年

区 分	面積(ha)	構成比(%)
農 地	215.2	19.9
山 林	574.9	53.1
水 面	34.2	3.2
その他の自然地	21.2	2.0
住宅用地	91.2	8.4
商業用地	16.2	1.5
工業用地	32.2	3.0
公共公益用地	41.3	3.8
道路用地	36.7	3.4
交通施設用地	4.9	0.5
その他公的施設用地	0	0
その他空地	14.1	1.3
合 計	1,082.0	

※地形図計測による

山口市都市計画課

表1-3 大歳地区の人口推移

(国勢調査による)

調 査 年	世帯数	男	女	人口計	人口密度(人/km ²)
大正14 (1925)	462	1144	1179	2323	214.7
昭和5 (1930)	492	1213	1243	2456	227.0
昭和10 (1935)	534	1303	1307	2610	241.2
昭和15 (1940)	526	1235	1290	2525	233.4
昭和19 (1944)	588	1164	1467	2631	243.2
昭和20 (1945)	戦後の混乱期により国勢調査は行われず、昭和22年に緊急調査を実施				
昭和22 (1947)	645	1490	1608	3098	286.3
昭和25 (1950)	716	1654	1732	3386	312.9
昭和30 (1955)	883	2023	2108	4131	381.8
昭和35 (1960)	922	1913	2075	3988	368.6
昭和40 (1965)	1209	2169	2505	4674	432.0
昭和45 (1970)	1336	2166	2350	4516	417.4
昭和50 (1975)	1847	2668	2927	5595	517.1
昭和55 (1980)	2524	3493	3689	7182	663.8
昭和60 (1985)	2822	3876	4147	8023	741.5
平成2 (1990)	3576	4533	4909	9442	872.6
平成7 (1995)	4585	5257	5488	10745	993.1
平成12 (2000)	5235	5785	6213	11998	1106.4

(注) 昭和19年調査の数は、2月23日実施の人口調査による。この年4月1日に大歳村は小郡町、阿知須町、平川・陶・名田島・秋穂二島・嘉川・佐山の各村とともに山口市と合併した。

(三) 行政区画と地名

大歳地区の行政区画の変遷については歴史編に譲るが、明治二十二年(一八八九)四月一日「市町村制」の実施によって、それまでの矢原村と朝田村は合併して「矢原朝田村」となった。この時旧村名は大歳として残され、旧来の小村名は字となった。

大字矢原・・・富田原・今井・上湯田・上矢原・中矢原・下矢原・下湯田・高畑
 大字朝田・・・黒川市・岩富・坂東・勝井・法満寺・高井・三作・和田・朝田・河内・馬庭・
 阿仙原

(表紙裏の地図参照)

昭和四十年(一九六五)六月、「住居表示に関する法律」にもとづいて、大歳地区でも新町名が施行され、富田原町・今井町・穂積町・若宮町・周布町・幸町・宝町・矢原町が生まれた。現在の行政区画は、次の三十一の自治会からなっている。

大字矢原・・・豊国マンション・富田原・今井上・今井下・上湯田上・周布団地・上湯田中・上湯田下・穂積県営住宅・上矢原・中矢原・矢原住宅・矢原第二住宅・下矢原・西矢原・
 下湯田・矢原宿舎
 大字朝田・・・黒川市・岩富・坂東・鴨原・勝井・三作・高井住宅上・高井住宅下・和田・朝田・河内・馬庭・山口朝田ヒルズ・朝田県営団地

小字 (穂ノ木)

地名は、「古代語 (文化) の化石である」といわれている。つまり、地名は言語と同時に発生した古代人たちの言葉 (思考) であり、無形の文化遺産なのである。その中で、今ではあまり用いられていないが、それぞれの時代に、それぞれの土地に生きた我々の祖先が、日常生活のなかで自然発生的に名付けた土地の名に「小字」というものがある。「穂の木」ともいわれ、そのひとつひとつには庶民の生活が刻まれており、庶民の生活をさぐる重要な手掛かりになるものがある。ここに、耕地・宅地について明治二十年に作成された「土地台帳」から大歳地区の「小字」を収録すると、次の三三四である。

大字矢原

原田 嶋村 富田原 上椋村 外村 原村 上富田原 上り立 内田 上向原 下村 壹町田
今井中 今井上 大高関 馬喰座 宛ノ木 三軒屋 高田村 麦田 高田 朝倉市 向河内
今井西 今井下 下富田原 穂積東 穂積 上柳原 飛石 高婦ヶ 下田 朝倉市下 五反地
上ノ坪 石祐 寺田 鈴木 高関 池屋敷 柳原 水道 東土井 西土井 阿弥陀堂 千周防
堂面 桜木 築田 三田地 四ノ坪 平六 介宗 樋ノ口 馬渡り 東前原 古宮上 古宮
土手外古宮 三嶋開作 青木面 蔵光 一畔竹 中矢原 末榎 宮部 五ノ坪下 宮ノ原 疫神元
河添 中ノ坪 芝村 二斗代 東二斗代 久兵衛村 八反田上 中前原 上戎原 堤外戎原

戎原下 前原下 八反田下 綿屋 蔵道 墓原 船原 式斗代下 流田 上堀河内 下井筒 井筒
高無毛 宮ノ後 久保下 宮ノ上 稲荷 久保田 花の木 八光面 水附 宮ノ前 惣作 寺河内
宮ノ下 吉光 高島 杵ノ振 大呑 中堀河内 下湯田 向島 砂田 久保河内 大歳 堀川
南大森 下堀河内 塚田 榎田下 甚左田 榎田 五反田下 河田 五反田 向原

大字朝田

河原 詰村 次原 宮原村 珍才 岩富 東川久保 芝村 椿河内 橋面 古曾坊 見取尾 西殿
馬場 南河内 沖村 古曾 東殿 出口 開作 行久 森河内 梅の木 坊河内 下丁田 上丁田
市後 下市 上市 南法寺 長通 蛭田 赤岸 土師神 引地 湯垣 灰田 森ヶ坪 大坪
松木 川島 原 坂東 宮成 九ノ坪 重藤 勢芸 岸本 坪ノ内 下山手 上山手 百合野
山田 木船 大田 三田地 上徳定 下徳定 山鳥 丁田 上鴨原 大鉢 橋詰 小鉢 下鴨原
馬渡 外ヶ坪 高井 宮ノ馬場 竹ノ砂 高井 稗尻 岸本 山崎 大迫 大浴 堂村 法満寺上
的場 はいの木 郷ノ尾 坂東田 岩滑 八面 岡 丸田 法満寺下 多羅ヶ迫 上内田 中内田
下内田 宮ヶ迫 片山 出水 作田口 宮本 宮ノ馬場 挽地 釜分 大垣 中田町 小敷
三作上 三作下 川久保 外川久保 上前原 下前原 下川田 東江木 上茶屋 河原田 平田
江木 小森 梅古曾 下郷田 中郷田 上郷田 道祖神 吉森 森歳 御樽 榎木田 上茶屋
沖ノ上 和田上 和田中 和田下 片野 山伏 茶屋 河原田 大地 藤田 出口 下出口 関屋

(四) 地形

大歳地区は東側の大字矢原と西側の大字朝田に区分されており、朝田の西半分は中国山地から派生した支脈を後背地としている(図1-2)。この支脈は南下するにつれて次第に高さを減じ、中間に阿仙原・馬庭の溪谷を作る朝田川によつて東西に分かれ、東部は法満寺川により再分割され、一方は勝井、一方は和田で終わっている。西部の方は朝田および小郡町の仁保津高地で終わっている。この支脈中最も高いのは楳木山(四一五・九メートル)で西支脈中にある。東支脈中には秋葉山(二六六メートル)、金山(二四〇・三メートル)がそびえている。(写真1-1)

一方、低平地は朝田東半分および矢原に

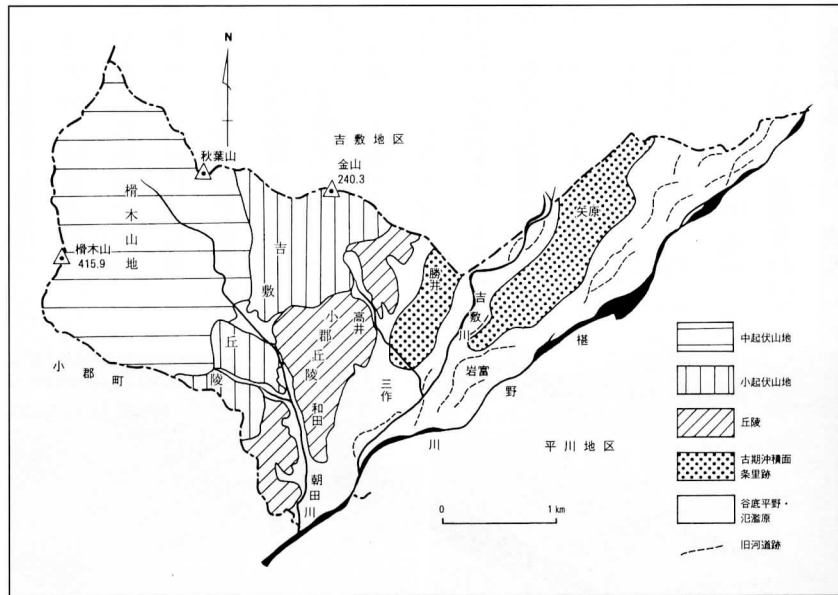


図1-2 大歳地区の地形分類 山口県(1972)、三浦(1982):松尾(1998)

- 下原 下川田 岡ノ口 沼ヶ迫 坊ヶ迫
- 岡島 中井 西角 郷太良 山田屋敷
- 土井 門前 けさ丸 神田下 下ノ浴
- 明神谷 神田中 札幌 神田上 原村
- 東打島 西打島 西坂下 西坂上 西坂西
- 音下 後ヶ浴 音中 河内下 河内上
- 花田 下代 上代 蓑越 上ノ原 大岩
- 楠ヶ谷 柳ヶ谷 開作 今山 唐笠
- 堂ヶ谷 川添 赤松 平原 下長谷 丸尾
- 下恋ノ久保 上恋ノ久保 藪ヶ淵 百合野
- 茅場 下洗川 芝舟 中洗川 大亀岩
- 谷頭 神田ヶ谷 短尾 斧磨 駄積ヶ原
- 音川 赤ヶ峠 観音上 涼ヶ谷 阿仙原東
- 阿仙原西 石鍋 阿仙原下 阿仙原上
- 三ツ尾 芋畑 小田岸下 小田岸上 稗畑
- 古曾坊 内田 赤坊 河内 三作 川久保
- 小鉢

(図1-1「小字地図」)

大歳地区小字配置図





写真1-1 南西部←→北部の山地

あつて、山口盆地の盆地床にあたり、その大半は榎野川とその支流である吉敷川の河川氾濫原であり、両河川の堆積作用による沖積層は早くから農地として活用された。榎野川と吉敷川の合流する岩富や三作の一带は、常習氾濫地帯であつたことを示す大きく屈曲する旧河川跡を見ることができたが、近年の圃場整備や宅地開発等によりその痕跡が見られなくなつてきた。古い民家の宅地は浸水を防ぐため水田面から一〜二メートルばかりの石垣を築いて造成されておる（写真1-2）、ある



写真1-2 石垣を築いた民家（岩富）



写真1-3 河岸段丘（勝井）

いは自然堤防や盛り土をした高い敷地に位置している。また勝井・和田の丘陵周辺部には、わずかながら河岸段丘を認めることができる。（写真1-3）

(五) 気候

山口地域の気象観測施設として、大歳地区内周布町に山口測候所が置かれている。福岡管区気象台の下部組織として、昭和四十一年（一九六六）に防府市から移設されたもので、山口盆地のほぼ中央に位置する当地で地域の気象観測を続けており構内には桜の開花予想の標準木があつた。

以下、気候の概観・気温・降水量・日照時間・風について、主として山口測候所提供の観測資料によつて大歳地区の気候を概観しよう。

気候の概観 春夏秋冬の区別がはっきりした、温帯多雨のどちらかといえば「瀬戸内気候区」にふくまれる。晴れた日が多く、四季による寒暖の差や昼夜の温度差が比較的

大きく、盆地特有の気候も兼ね備えている。

気温 一月の平均気温四度前後、八月の平均気温は二七度前後である。夏は日中うだるような暑さ冬は底冷えがするような寒さの日もある。春・秋の晴れた夜は放射冷却により涼しく感じる日があり、霧が発生することもある。(図1-3・1-4)

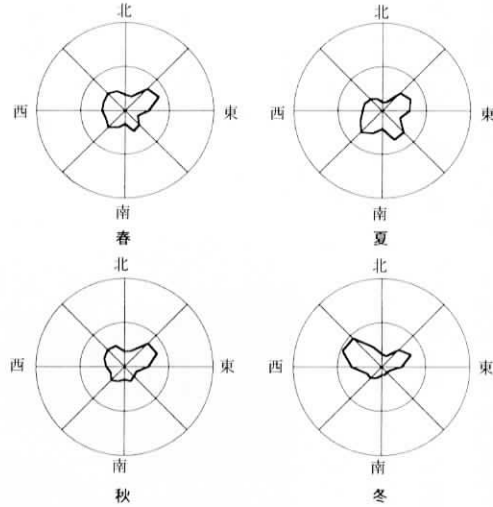
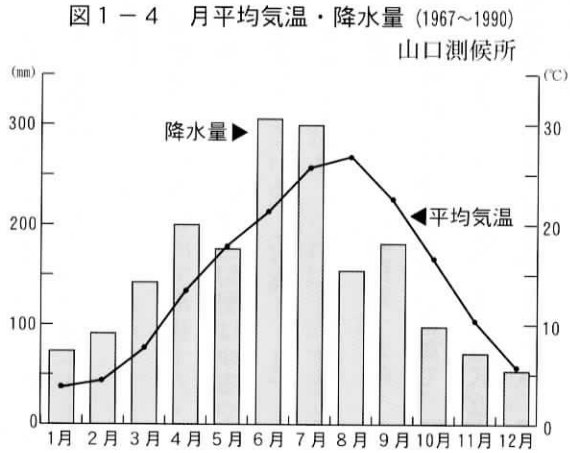
降水量 年間降水量は一八〇〇ミリメートル前後で、ナタネ梅雨の四月、梅雨の六・七月、秋雨の九月と三回のピークがある。(図1-4) 周囲の山地による貯水能力が大きいため、水不足の心配はほとんどない。集中豪雨で被害が出るのは、梅雨と台風の雨によることが多い。(図1-4)

日照時間 年間晴天日数は一六〇日前後であって、五月晴れ、太平洋高気圧に覆われる夏、秋晴れの十・十一月は月平均日照時間が多い。(図1-3)

風 夏には瀬戸内海側から弱い海風が吹き、暑さをやわらげてくれ、冬には俗に「鳳翔おろし」と呼ばれる北寄りの季節風が吹き、寒さにふるえる日もある。強風は、春さきに低気圧が発達しつつ日本海を通過するとき、台風によるほかはあまり吹かない。(図1-5)

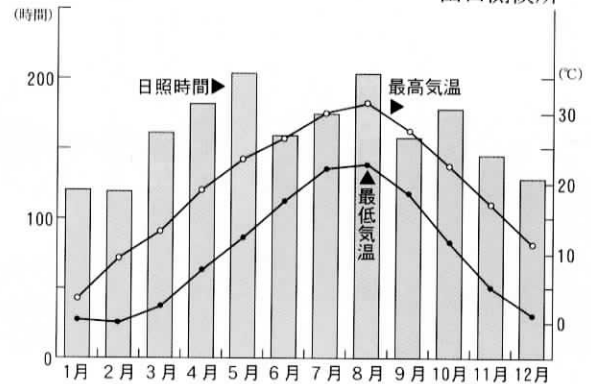
(六) 川と生活

榎野川 大歳地区に沿って流れる榎野川は、昔から農耕に恵みの水を与え、この地の文化をはぐくんでくれた母なる川である。その水源を鳳翔山の東の金山谷に発し、宮野盆地・山口盆地を貫流し



外円:20%、内円:10%
図1-5 季節別・年間風配図 (1976~1996) 山口測候所

図1-3 月別 平均最高・最低気温・日照時間 (1967~1990) 山口測候所



ながら、仁保川・一の坂川・吉敷川・九田川・四十八瀬川などをあわせて、山口湾に流入する二級河川である。大歳地区には、錦川・前田川・吉敷川・法満寺川・朝田川などの支流がある。本流の流路は三〇・三キロメートル、流域は山口市の大部分と小郡町をふくみ三二四・八平方キロメートルで、流域面積では県下六位である。流域面積中約三〇パーセントが低地で、河口から約二〇キロメートル上流の山口市街地で海拔二五メートルから三五メートル、大歳地区では周布町の山口測候所で海拔十六・三メートル、三作で海拔一〇・五メートルと勾配はゆるやかで、ゆったりとした流れになっている。(写真1-4)

二十一世紀に残したい自然の県内版として選定された「山口の自然一〇〇選」(昭和五十九年)の中で、川そのものが選定地になったのはこの榎野川だけだった。それだけ流域の自然が豊富で、野鳥の宝庫でもあり、しかも生活の身近に気軽に利用されているからだろう。そして、大歳地区近辺は天然記念物「源氏螢」の発生地である。本流筋では護岸工事などのため見られなくなったが、朝田川流域では時期になると見事なホタルの乱舞が見られる。



写真1-4 榎野川と自転車道

榎野川の氾濫

河川の長さにくらべ流域が広く起伏の大きい山地を有し、山口盆地に多くの支流が集まるため、堆積作用による肥沃な土壌をもたらした大歳地区は、古くから農耕に適した土地であった。だがその反面、低湿地で氾濫をおこしやすく、岩富(古曾坊)の田中家に伝わる『年中吉凶記録』によると、元禄十三年(一七〇〇)〜元治元年(一八六四)の一六四年間に田畑冠水や堤防決壊などの記録が三八回もみられる。これは平均すると約四年に一回の割合になる。

近年では、昭和三十九年(一九六四)六月や、昭和四七年(一九七二)七月の洪水による被害が大であった。

河川公園

矢原河川公園は、昭和四十七年(一九七二)に榎野川の河川敷を利用して作られた。当時、「河川法」によって河川敷を利用する公園の施設には樹木・建造物を残すことはできなかつた。そのため繁茂していた樹木も伐採の対象とされていたが、付近一帯が「野鳥の宝庫」でもあり、自然を残したいという地元の人々の強い要望によって伐採をまぬかれ、現在のような緑の多い自然景観を残す公園となった。



写真1-5 バードウォッチング

スポーツ・レクレエション活動など、市民憩いの場として多目的に利用されている。河川公園内の樹種は三〇余種もあつて自然の姿を保ち、四季折々に渡ってくる野鳥の種類も多く、県内有数の野鳥の観察地として、バードウォッチングに訪れる人も多い。(写真1-5)

山口市宮島町を起点に、小郡町・美東町を経由して秋吉台国定公園のある秋芳町にいたる、自転車・歩行者専用の「山口・秋吉台自転車道」が、大歳地区の樫野川沿いを通っている。昭和五四年(一九九七)に開通し、全長三一・四キロメートル。レクレエションとしてのサイクリングやジョギング・ウォーキングに、そして通勤・通学と市民の安全道路としてにぎわっている。(写真1-6)

野鳥

日本に生息する野鳥は約五五〇種といわれ、そのうち山口県内では約三五〇種が確認されている。矢原河川公園付近では約一七六種が確認されており、中流域としては国内でも珍しい場所とされ、冬季カモ類の観察には、県下でも有数の場所である。



写真1-6 通学



ヒドリガモ・マガモを中心に、コガモ・カルガモ・オナガガモ・ハシビロガモ・トモエガモなどのカモ類のほか、カイツブリ・コサギ・ダイサギ・アオサギ・ゴイサギ・セグロセキレイ・バンなどが周年観察できる。秋冬期にはユリカモメ・ハクセキレイ・キセキレイ・クイナなどが加わる。また、中州の雑草地、芦原、河川敷の樹木、堤防付近の樹林では、アオジ・ジョウビタキ・ツグミ・キジ・ウグイス・イカルなどを見ることができ。

しかし、近年では矢原河川公園一体に多かつたこれらの鳥も、上流に向かって分散しつつある。野鳥が好んで飛来し生息するためには、気候が適していること、豊富な餌があり、それにもまして安全な環境が必要である。

歴
史

